岡本かの子全集

第三巻

岡本かの子全集

第三巻

TARO

冬樹社

TARO

岡本かの子全集　第三卷
昭和四九年四月三〇日初版第一刷發行

著　者　岡本かの子
發行者　高橋直良
發行所　冬樹社
東京都千代田區神田神保町二―一八
電話東京二六四―〇三四六
振替東京七七五七
印刷所　株式會社太洋社
製本所　有限會社三和製本所
製函所　株式會社光陽紙器製作所
本文用紙抄造　王子製紙春日井工場
表紙用クロス　日本クロス株式會社
裝　畫　岡本太郎
裝　幀　栃折久美子

MJ 91010237

0391-01503-5190 ©TARO OKAMOTO 1974　検印省略

第三卷　目次

花は勁し……三
過去世……三〇
夏の夜の夢……四四
金魚撩亂……五六
落城後の女……一〇四
勝ずば……一六九
狐……一八〇
蔦の門……一九四
扉の彼方へ……二〇六

酋　長……二九
やがて五月に……三三
解題・校訂……三九一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小

說

3

花は勁し

青みどろを溜めた大硝子箱の澱んだ水が、鉛色に曇つて來た。いままで絢爛に泳いでゐた二つのキヤリコの金魚が、氣壓の重さのけはひをうけて、並んで沈むと、態と揃へたやうに二つの顏をこちらへ向けた。うしろは青みどろの混沌に暈けて二ひきとも前胴の半分しか見えない。箱のそとには黃色い琥珀の粒の眼をつけた縞馬の置物が、水粒が透けて汗をかいたやうな硝子板に鼻を擦りつけてゐる。

箱の蓋の上に置いてある鉢植のうす紅梅がぽろ〳〵散つて、逞しい蕋が小枝に針を束ねたやうに目立つ。

新興活花の師三保谷桂子は、弟子の夫人や令孃たちが歸つたあとで、材料の殘りの枝を集めて、自分だけ慰みの活花をずんどうに挿して、少時(しばらく)眺め入つてゐたが、俄に變つて來た空の模樣を硝子戸越しに注意しながら、少しの天候の變化からもぢきに影響される金魚の敏感な樣相を觀まもつた。

空の模樣はます〳〵險惡になり、しぶき始めた雨と一緒に光り出した稻妻の尖端が、窓硝子を透して座敷

の中の炭爐にさした。
「金魚、縞馬、花、稻妻――まるで幻想詩派（サンボリスト）の文人たちの悅びさうなシーンだね」
落ちついて水を持つて來た姪のせん子に、聞かせるといふほどの意志もなく桂子はいつた。
それから桂子は、桂子がフランスを發つて來る間際まで、世紀末生殘りの詩人が、まだ飽きずにこんな感じの詩を作つてゐたことを、ちよつとの間、憶ひ出してゐた。
未完成のまゝ花器の根元を持つてそつと桂子が押しやつたずんどうの花活（はないけ）へ、水を差しながらせん子がいつた。
「先生けふは三十日――あしたは晦日――今夜でも小布施さんにお金を持つてつてあげないぢや」
小布施は桂子の遠い親戚の息子で、もと桂子が畫を習つてゐた時の同門でもあつた。不遇で病弱で、長く桂子に物質的補助をうけてゐる畫家であつた。
桂子は花の屑を包んで膝かけを外しながら、いつも病氣勝ちな小布施に何かにつけて氣を配るせん子をいぢらしいと思つた。ひよつとしたら內心、小布施を愛してゐるのかも知れない。桂子はそれから襟元を少し搔き寬げ、右手の拇指を右の前脇の帶に突き込んで扱くと同時に、體格のいゝ胴を捻つた。博多の帶がきし〳〵鳴つた。
「あゝ窮屈だつた。お弟子達には行儀よくしてなくちやならないから辛いね。せん子、お茶でも持つて來ておくれ」
茶室造りの疊の根太の下に響いて、やゝ烈しい雷鳴が一つしたあとは、ずつと音響が空の遠くへ退いて行つた。桂子は、姪でも內弟子でもあるせん子を相手に麥落雁を二つ三つ撮んでから漆塗りの卷繪の臺に載つてゐる紙包の嵩をあつさり掴んだ。これは今日の弟子達が置いて行つた月謝の全部だ。桂子はそれを袱紗に

包んで、
「どれ、若い戀人に會ひに行かうかね」
なかばせん子の氣を牽きながらかういつた。
せん子はまはりを見廻して眉を顰めた。
「冗談にもそんな云ひ方はよくありませんわ。人聽きが惡い……」
その聲には、伯母でもあり先生でもある桂子の身の上を憶ふ、純粹な響きだけだつた。
「ひとり身の女がこんな口を利くやうになるのはよく〳〵のことよ」
いくらか桂子は悵然とした口調でかういつた。
だが空が和んで來て生毛のやうに柔く短く截れて降る春雨を傘に凌いで、內玄關から出て行くときには、桂子は均齊のとれた大柄な身體を、何の蟠りもなくすつくりと伸して、晝間は人目につくと云つて小布施を訪ねるのをとめだてするせん子を見返つて、
「晝間堂々と行く方が、世間の噂に逆襲をして却つていゝんだよ」といつた。
せん子は今更ながら美しい若い伯母の優しい氣立てのなかに、どんな苦勞も力强く凌いで行く精神力の潛むのを感じ、それをそのまゝ現はしてゐるやうな桂子の後姿を、信賴の眼差で見送つた。それから自分にもその元氣が移りでもしたやうな張つた聲で、勝手元の方を向いて云つた。
「ばあや、前庭の桃葉珊瑚に實が一ぱいついてるよ。青い葉の間に混つて青い實がついてるものだから、まるで氣がつかなかつたわ。」
活潑な足音がして內弟子の桑子と書生が、婆やより先にせん子の佇つてゐる洋館の內玄關の扉口の方へ駈けて來た。

桂子は邸宅と商家と肩を闘はして入れ混つてゐる山手の一劃から、窪地へ低まつてゆく坂道を降りて行つた。櫻の並木があり、道の縁を取つてゐるまだらな龍の髭に、品格のある庭木が藪からしや烏瓜の蔓に絡まれながら殘つてゐる。むかし相當の庭園の入口でゞもあつたものを、庭は住宅に埋められて、道だけ殘されたものであらうか。硬い老幹と、精悍な痩せた枝の緊密な組み合せは、鋼鐵と鑄鐵を混ぜ合せて作つた廊門を想はせる。

桂子はこの鋼鐵の廊門のやうな堅く老い黝(くろ)ずんだ木々の枝に淺黄色の若葉が一面に吹き出てゐる坂道に入るとき、ふとゴルゴンゾラのチーズを想ひ出した。脂肪が腐つてひとりでに出來た割れ目に咲く、あの黴の華の何と若々しく妖艶な緑であらう。世の中には殆ど現實とは見えない何とも片付けられない美しいものがあると桂子は思つた。

桂子は一人になつて寂しい所を歩いてゐると、チーズのやうな何か強い濃厚(しつこ)いものが欲しくなつた。講習所の先生として、せん子などを相手にお茶請けを麥落雁ぐらゐな枯淡なもので濟ます時の自分を別人のやうに思ふ。外國へ行つてから向うの食物に嗜味を執拗にされたためであらうか。

雨は止んで、日ざしが黄薔薇色の光線を漏斗形に注ぐと、斷れ〳〵に殘つてゐる茨垣が、急に膠質の青臭い匂ひを強く立てた。桂子は針の形をしてゐながら、色も姿も赤子のやうに幼い棘の新芽を、生意氣にも可愛らしく思つた。

「刺すなら刺してご覽。」

桂子は、指紋の渦が緻密で完全に卷いてゐる人差指を伸して、棘の尖を押した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新芽の棘は輕い抵抗を示しながら、ふによ〳〵と撓んだ。强く押すと芽の腹の皮の外側は、はち切れさうになり、内側は皺が寄つた。するとその芽が切なく叫んだやうに、赤子の泣き聲が桂子の耳の奥に幻聽を起させた。桂子は指を引込めた。

三十八の女盛りでありながら、子供一人生まなかつたことが、時々自分に責められた。幾人か生んでゐべき筈の無形のこどもの泣聲だけが、とき〴〵耳についた。今まで數多くうけた處生上の迫害やら脅迫から桂子はいくらか被害妄想にかゝつてゐて、幻想や幻覺はしよつちゆうあつた。桂子は氣分を襲つて來た悲慘な蝕斑に少し堪らなくなつて、驅け出して少女のやうに小布施のアトリエへ轉げ込んで、年下の男の友人に何かおいしいものでも喰べさして貰はなければ慰み切れない辛い氣持になつた。ごくりと唾を呑むと涙がほろ〳〵とこぼれた。だが、ふと陽がさしてゐるのに氣がついて蛇の目を窄め、無理にぐん〳〵上りの坂にかゝると、自分の優秀な肉體が、自分の肉體の優秀なのを足駄を踏みかけて行く兩股の上に力强く感じた。男と同じほどの背丈があり、それに豐かな白い脂肉が盛りついてゐる自分を崩折れさすわけにはゆかないと、氣持が立ち直つて來る。

坂を上り切つて、晴れかゝる春先の陽の下の町の屋根々々を見返つたときには、桂子の氣分の悲慘な蝕斑は薄れて、腹痛の癒りかけたときのやうな感謝すべき、ほつとした氣持になつた。笑ひ度いやうな痛痒い鈍痛だけがかすかに殘る。するとほの〴〵とした野心的(アンビシアス)なものが頭を擡げた。

「苦しい人生をせめて花で慰め度い。私の花を溢らせ度い……。せめてこの都にだけでも一ぱいに……」

桂子の人生に對する愛撫に似たものが、野心に張り擴げられて、蠟銀色のうすものゝ翼となつて、陽炎の立ちかけてゐる大東京の空を輕く觸れ去るやうに感じた。

桂子は巴里の美術服裝家マレイ夫人に招聘されて六年間の佛蘭西滯在中、ロンドン在留同胞有志の懇望

で、海一つ越えて一ヶ月程活花を敎へに行つた。夜は毎夜露き出しの夜會服の背中を寒がりながら、シーズンの演劇を見て廻つた。一流劇場のクイーン座でバーナード・ショウの「セント・ヂョン」を見た。一般の批評では　この著者は佛蘭西の聖少女を痛快に揶揄したやうに取沙汰された。しかし、桂子は聖少女がこの著者の氣持よげに薙ぎ廻す皮肉の刄を、身に遣り過して一つも傷をとゞめない不逞の正體を感じ取つた。女には女の觀る女の正體がある。他の人意の批判は目の觸りにならない。自分でも意識し盡せぬ深い天然の力が、白痴であれ、田舍娘であれ、女に埋藏されてゐて、強い情熱の鈎にかゝるときに等しくそれが牽き出される。それが場合によつては奇蹟のやうなこともする。または一生埋れ切る場合もある。どつちが女としての幸福か知れないけれど。

桂子は巴里へ歸つてから、その劇のことをマレイ夫人に話すと、

「しば〳〵作者の意圖以上のものが出てしまふのが天才の藝術だといひますね。ショウはたぶん天才でせう」

白けてはゐるが敬虔に媚びた笑を交へた彼女獨得の美しい笑ひ方をした。

「丹花を口に銜みて巷を行けば、畢竟、惧れはあらじ」

これは女學校友達の女流文學者K――女史が、桂子の講習所を開くとき掛額に書いて呉れた詞句だ。講習所の娘たちの間に、これを讀んで、「丹花の呪禁」だといつて、活け剩りの花を口に銜へ、腰に手を當てゝ、映畫に出て來るジョルヂユ・サンドのやうな氣取つた恰好で濶歩するのが一時流行つて、やがて廢れたが――。

桂子は坂の上り口から雨上りの人少なの一筋道に遠見がついて、その兩側に邸宅が稀で、新舊の商家がずらりと、行人に對して好奇心に貪慾な大小の口のやうな店先を開けて待ち受けてゐるのを見渡すと、今更たぢろぐ思ひが湧く。小布施へ通ふ桂子の噂がこゝらに一ぱい擴がつてゐるのを、かねて桂子は知つてゐた。

桂子を敵視する同業者の家もあつた。ふと、あのK――女史が書いて呉れた詞句のやうに、花の莖でもぎつちり糸切歯と糸切歯の間に噛み締めて歩いて行くなら、この惧れに堪へられさうに思へた。一時の間でも花に離れてはならない。彼女は肩を一つ揺つて、また、肉體の雄勁な感覺から自信を取り出して、眞直ぐに歩きだした。

入口に俥止の杭が打つてある、質素な住宅地の太く通つてゐる筋の道路を右に切れ込んだ角から二軒目に、小布施の住居があつた。下は日本間になつてゐて、二階は畫室になつてゐた。

金目(かなめ)黐垣の抽き過ぎて出た芽を、二つ三つ摘み捨てゝ、松材の門の扉に手をかけ乍ら桂子が振り仰ぐと、「程君畫房」といふ新しい標札がかゝつてゐる。字は小布施の洋畫家風の筆蹟である。その雨濕りが乾いたばかりの標札を見上げた時、桂子は何か直覺的に、はあ、また體の工合がよくないのだなと思ふ。

不遇傲岸に見える小布施は、案外、時流に神經質で、十六七年も前桂子と同門で矢來町のY――先生の畫室に預けられてゐた時分から、逐次獨立するまで、後期印象派、ダヾ、表現派、新古典、超現實派と、およそ日本で尖端的に見える畫風は魁けしてこれを取り入れ、通俗派の方面にぶつかつて行つた。

桂子は常住青年らしい鬪志を失はない彼に敬服したが、彼自身何ものをも掘り下げ得ない浮いた忙しさを危んだ。そこにはまたさういふモダンを取り入れて詩(ヴヴ)示することを意識した彼自らの慊厭の氣持が、人を揶揄した筆つきや、どす黑い色調で觀者に逆襲してゐた。世間は戸惑つて、彼を將來ある未完成の畫家の範疇にあつさり片付けた。勿論賣れる繪ではない。

體質に伏在してゐた結核性がいよ〳〵肺を冒し出すやうになつてから、小布施の焦燥が增すのに桂子は氣

づいた。
「私は、お金がはいるうちは、生活を保證してあげますから、焦つてはいけませんよ。毒ですよ」
桂子は何度も云つた。
すると小布施は、
「いや、そんなことぢやない。人間といふものは、何等かの方法で始終自分の存在を社會に確めて居たいものだ」
彼は抽象派(アブストレート)の繪を描いてゐたのを途中から止めて、東洋藝術省顧の風潮に從つて、洋畫の道具を片付けて墨繪に凝り出した。程君房とか方于魯とかいふ桂子の耳には緣遠い支那の古墨の作銘の名を、桂子は先頃から屢々小布施の口から聽いたものだが、それを自居の雅名にして、標札にまで書いて出さねばならない氣持にまでなつたのか——小布施の時流憧憬は病の進むに從つて、一々、卽物化さねば心が安まらない風に見え出した。
桂子が家へ入つて行くと、小布施は階下の十二疊に桃山風の屏風を引き廻らして、中で床に臥つてゐた。枕元には琺瑯質の鍋だの西洋皿だのが狼藉としてゐて、その間に墨の桐箱と墨の塗沫された畫仙紙の上に水筆が轉がつてゐた。
「まあ、どうしたの、この有樣は。ねえやは？」
小布施は先程から桂子の入つて來るのを足音で知つてゐたのに、わざと繪葉書のアルバムに眼をむけ續けてゐたが、かういはれると、眩しさうに眼を瞬いて、はじめて桂子を見上げた。疳癖があつて、蛾のやうな眉が高い額に迫つてゐる下に、柔和な細い眼がいくらか血膜炎(マヽ)にかゝつて、怯えを見せてゐた。元來、青白い顏色が急に淺黑くなつてゐる。

「しげ（女中の名）はきのふ暇をとつて行つたよ。今どき獨身者の病人の家に、給金だけで永くゐる娘はないよ――遺産つきで女房の契約でもしてやらなけりや」

ちよつと皮肉にいつたが、すぐ素直な聲になつて、

「そんなことはどうでもいゝ。僕はこの二三日、女中がゐないんで、湯を湧かしたりごみ〳〵した用事で疲れて、本讀んだり畫をかくのが面倒なんで、寢ころんでひとりでに君のことを研究してゐたのだがね。君はやつぱり女であつて、女といふものには持つて生れた貞操といふものがあつて、それが結局、根本で萬事を解決するんぢやないかと思つたよ。君どう思ふ」

小布施はその證據のやうにペラ〳〵とアルバムの頁を繰つた。そして、曾て見たことのない懷しい顏つきをした。今度は桂子が眩しい眼つきをした。

「何をつまらないことをいつてるんです。あたしのことなぞ今の問題ぢやないぢやありませんか。それよかあんたの病氣はどうなんです」

かうは訊ねたものゝ桂子は、小布施がいひかけた自分のことについての感想を、もう少し聞き進みたかつた。

「何故、今ごろそんなアルバムなんか持ち出してるの？」

アルバムは桂子が外國へ行つてる間、根氣よく小布施によこした繪葉書を挾んで置いた部厚な集成である。今頃珍しさうに見返すまでもない程、二人の間の過去の存在なのであつた。

「今になつてこの繪葉書を見て僕は思ふんだが、君が外國でこれを買ひ集める時は、單に君が自分で興味を牽かれた景色だの、芝居だの繪だの、陶器だの人形だのの繪葉書だらうが、こつちへ送つて呉れた時の趣意は、結局、僕を啓發して呉れるつもりのものになつてゐるらしいね。

ところで、こゝに一つ面白いことがあるのだ。この三百枚かの繪葉書に書いた君の通信文を見ると、その時々の挨拶やら、旅の印象の報告やらで一枚一枚違ふが、君の主觀の思想めいたものを探し出すと、きまり切つてたつた一つなんだ」

「どんな主觀や思想なの」

「さういつたら君自身だつて驚くだらう。つまり、かうなんだ——私はどこまでも繪を生きた花で描き度うございます。繪の具ではどうしても物足りません——僕が二十で君が確か二十二のときだつたね。君が初めて想像で描いて來た理想畫を僕がうつかり罵つたら、君が二三日欝ぎ込んで考へてゐたが、突然Y先生の前へ行つて、私は繪を生きた花で描き度うございます、繪の具では物足りません。さう云ひ切つてパレットを割つて仕舞つた」

桂子はそこまで聞いて、その當時のそのまゝの事をはつきり憶ひ出した。

當然戀人同志になりかけてゐた二人の仲が、そんな經緯で變に醱酵せず、友情の方へ逸れて仕舞つたのではあるまいか——そして、華道の家元の父親の家へ戻つて、桂子は生花に取りつき出した。娘はその時の執念が、こ　　葉書の通信文の殆ど一つ一つにも一貫して通つてゐる、と小布施は今さらアルバムを桂子の　　云ふのである。

「私いち　　を意識して繪葉書送らなかつたわ」

「ならいゝかい。ところ〳〵讀んでみようか。そらこゝに前衞派的な藝術論がちよつと書いてあり——それから、この藝術理論は私の活花藝術にも立派に應用されるのです。とにかく、私は私で私の理論性でも感情性でも凡て私の全生命を表現しなければなりません——ね、それ歴々たるものだ」

かう云はれて見ると、桂子はたつたさつき坂の上で、都會の屋根々々を見渡して、思はず自分が擴充させ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com